
超常戦争

獅施額羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超常戦争

【Nコード】

N0439H

【作者名】

獅施額羅

【あらすじ】

隔離された錬金術師たちの住まう国に落ちこぼれの少年がいた。いつものように平和に一日を過ごしていた彼だったが……。

第一章 錬金の子（前書き）

もちろんフィクションです。まじめに書いておりますが質は保証いたしません（超ド素人故に）。忙しさとタイピングの遅さから更新も遅くなると思いますが暇つぶしにでも読んでいただけると幸いです。あと否定的なものでも感想など頂けるとありがたいです（本音..一人暮らしなんて寂しいわけです。人との関わりとか欲しいんですよ..ホントに）。どうかよろしくお願いします。

第一章 鍊金の子

第一章 鍊金の子

のどかな午後、日は高くそよ風の音とともに少年たちの話し声が聞こえる。

三十人ほどの子どもたち（十三、四歳くらいであろうか）が、三十歳くらいの男の話を聞きながら楽しそうに、かつ慎重そうに何かの作業をしている。

「さすがに三年目にもなると」

男が少年たちの作業を見ながら言った。

「熱素の扱いも手慣れたもんだな」

ボンッ

男が言った直後に一人の少年の目の前から小規模な爆発が起こった。男は「またか……」というような呆れた表情をした後、すぐに厳しい顔になりその少年を怒鳴りつけた。

「またお前か、ヘルメス！ いまだに熱素をまともに扱えないのはお前だけだぞ！」

「違いますよ、フラメル先生。この器材が勝手に……」

スズで顔が真っ黒になったヘルメスと呼ばれた少年は口から黒い煙をはきながら反論した。ヘルメスの近くには、最初から爆発が予想されていたのか、人はいない。

「そんな訳がないだろう。先生はここで鍊金術の授業を受け持って六年近くになるが、お前ほど失敗の多い奴ははじめてだ」

男はため息まじりにつぶやいた。

「先生の説明が足りないからですよ」

「お前以外の生徒はみんなできているぞ」

「じゃあ僕の近くで指導してくれるとか……」

「それで何人の先生を病院送りにした？」

「……えーと……二人……？」

「……かける？」

「……六」

ふたりのやり取りをまわりの生徒たちはニヤニヤしながら聞いている。

ひとりを除いては。

「先生、授業を進めてもらえませんか？」

ひとりの生徒がイライラした口調で言った。

「ん？ ああ、すまないなゲオルグ」

「では授業を再開する。ヘルメスはきちんと掃除をしてからだ」

授業が終わり、ヘルメスはゲオルグと学校を出た。汚れはまだ取れきれていない。

「金、金、金ってみんなバカみたいだ」

ヘルメスはつぶやいた。

「金なんて創っても売る国はもうないってのに」

現在からおよそ五百年前、彼らの国は世界の空間から切り離された。原因については高名な錬金術師たちの間で日夜議論されているが不明である。

「金を創るだけが錬金術じゃないだろう」

隣を歩いていたゲオルグが反論した。

「あらゆる病を治す薬を創ったり、空を飛べる道具を創ったり、金だって創れば金をめぐるっての争いを無くせる。錬金術はこの国を平和にするんだ」

ゲオルグは嬉しそうに言った。

「僕にはそんな目標があるのに君は授業で邪魔ばかり……」

「悪かったよ。頑張ってこの国を平和にしてくれ。じゃあ、俺はあそこの森の川で体を洗ってから帰るから。親にまた爆発させたの知られると、今度は親が爆発するからさ」

ヘルメスはうんざりしたようにそう言って家路の途中の森の中に急いで入って行った。

「くだらないシャレを考えるんならもう少しマシなことを考えてくれよ……」

残されたゲオルグはつぶやいた。

森の中に入るとヘルメスは川の方角に走った。ほとんど毎日来ているだけあって木ばかりでも迷わない。彼は川で体を洗い、あらかじめ用意してあったスベアの服に着替えた。

真っ黒だった彼の髪は金色に戻り、鋭い青色の眼が輝きを取り戻した。少し高い鼻、薄い唇、スラッとした顔は美少年そのものだった。

(……あれ?)

ヘルメスがなにげなく来た方向とは反対の岸に目をやると泉が見えた。

(あんなところに泉なんてあったかな?)

普段と違う風景に戸惑いつつも、好奇心からそっと泉に近づく。すると泉が突然発光した。

第二章 魔術の子

第二章 魔術の子

広い草原で、少年が一人座りながら空を見ていた。黒く厚みがある雲が空一面を覆っている。彼の視線の先には、箒にまたがり楽しそうに鬼ごっこをしている子どもたちがいた。

彼らの国が世界から空間ごと切り離されておよそ五百年。国の領土の終端と終端を強引に繋がれ、平面の発展を制限された魔術師たちは、縦の発展を続けてきた。箒で空を飛び、空中には数多の建造物が浮かんでいる。この狭い世界で生きていくことを受け入れた彼らは、高度な技術の発展よりも豊かな暮らしを選んだ。その結果、建造物は美しく、空に浮かんでいる庭園には全国民が食べていくには十分な農作物が栽培されている。

(……魔術か……)

子どもたちは、ただ追いかける遊びに飽きたのか指先から小さな火球を飛ばし始めた。その様子を少年は複雑な心境で眺めていた。

少年は人差し指を前に突き出し、意識を指先に集中させて火球を飛ばそうとした。しかし彼の指からは火球はおろか、煙すら出なかった。

「ここにおいででしたか、王子」

少年のもとに眼鏡をかけた初老の男性が近づいてきて言った。

「レアード王子、そろそろお勉強の時間なのですが」

「今日は勉強は無しだ」

レアードは空を見ながら答えた。

「し、しかし……」

「学者、あなたの学習計画を見せてもらったが内容があまりにも低レベルだ。あの程度のことは六歳の時に自主的に学習した」

「六歳であれを……？ かなり専門的な内容のはずですが……」

学者は信じられないというような顔をしている。

「あれで専門的？ 話にならないな」

レアードは冷たく男性に言った。

「し、失礼しました」

学者は逃げるようにその場を去って行った。

（まったく、最近来る学者はあんなのばかりだ。低能で長続きしない。私が賢いのか、それとも彼らの頭が悪いのか）

レアードはため息をつきながら腰を上げ城へと向かった。

まばゆい光が広い部屋全体を照らしている。部屋には豪華な装飾、テーブルやイス、料理が天井のシャンデリアの光を受け、まるで宝石のように輝いている。使用人たちは少し緊張した表情でテーブルのそばで控えている。そんな中、王家の食事は終盤に差し掛かっていた。

「レアード、今度の学者はどうですか？」

「母上、あの者では役不足ですよ」

「そうだろうな。先ほど辞表が提出されたそうだ。なかなかお前の満足するような学者はいないものだな」

国王はそう言うときスープを少し口にした。

「父上、いままで来た学者の中にも素晴らしい者は何人もいました。なぜ彼らに私の教師を続けてもらわなかったのですか？」

レアードは少し怒ったように父に尋ねた。

「仕方ないだろう。すぐれた学者には、その者にしかできない研究がある。学者になるわけでもないお前のためにこの国全体のための研究をやめさせることはできません」

「わかっていますよ、それくらいのこと。ただこの国で唯一魔術が使えない私には勉強くらいしかすることがないもので」

五歳くらいになるとこの国の子どもたちは皆、魔術で遊びはじめ

る。しかしレアードは生まれつき魔術を使うことができない。魔術師の国の王子が魔術をつかえないことが国民に知られると大きな混乱を招きかねないので、レアードは幼いころから友達と遊ぶことを許されなかった。なぜこの国で自分のみが魔術を使えないのかを疑問に思った彼は、あらゆる本を読み漁り、学者に匹敵する知識を身に付けたが理由は謎のままである。

「レアード、今日はずいぶんと機嫌が悪いのね。疲れているのなら早めに休んではどうかしら」

王妃はやさしい口調で彼に言った。

「そうですね。今日は早めに休むことにします」

そういうとレアードはデザートの最後の一口を食べ立ち上がった。

「おやすみなさい。父上、母上」

レアードは自室で寝る前の読書をしていた。読み古した専門書だが、彼は句読点すら見逃さないというほど集中していた。

区切りのいいところで彼は本を閉じた。

（まだ眠くないな）

ふと鏡に目がいく。いつものように黒髪、輝く鋭い茶色の眼、少し高い鼻、薄い唇、スラッとした顔が鏡に映る。しかし次の瞬間、鏡に映った彼の髪が金色に、瞳の色が青色に変わった。彼が驚き部屋を出ようとしたその時、鏡が突然発光した。

鏡の光が消えた時、彼はその場から消えていた。

第三章 出会いと予兆

第三章 出会いと予兆

森の中、金色の髪少年と黒色の髪少年が眠っている。そよ風がやさしく彼らの頬をなで、温かな木漏れ日が彼らを包んでいる。しばらくして一羽の鳥が鳴き声を上げると、彼らは同時に目を覚ました。

(……なぜ森に？ 私は部屋にいたはずでは……)

(あれ？ 泉が無くなってる……)

彼らはあたりを見回すとようやく互いの存在に気がつき、そして互いに固まった。

彼らは眼と髪の色が違うことを除けば瓜二つの姿をしていた。

「あなたは一体……それにここは……」

レアードはあたりを見回し状況の分析を試みた。ヘルメスは未だに呆けている。

(目の前にいるこの男のことはおそらく考えても結論は出ないな。それにしてもこの反応、学のなさそうな奴だな。さて、腹の減り具合から考えてあまり日数は立っていないはず。日光の角度、この植生から考えると……)

「おい、ここは城の東と西の森、国の終端の森だろう？」

「シロってなんだ？ ここは学校の東西の森だろう」

「ガッコウ？ なんだそれは。あまりふざけていると、ただでは……」

(いや、こんな私そっくりな顔の奴が私の国にいれば噂をきかないわけがない。ここは世界の切れ目だったな。この方向にかつてあった国は確か……まさかな……)

「あなたは錬金術師か？」

レアードは金髪の少年に尋ねた。

「なに当然のこと言ってんだ？　ここは錬金術師の国なんだから当然だろ」

彼の答えを聞きレアードは確信した。

「なんだよ。なに驚いてんだ？　お前だって錬金……」

「いいか、よく聞け」

「な、なんだよ」

金髪の少年の言葉をさえぎりレアードは説明を始めた。

「約五百年前にあなたの国は空間ごと切り離された……そうだな？」

「そうだけど。あなたのって……？」

「やはりな……。実はその頃、隣の国も同じように切り離されたんだ」

「うそだろ？　隣の国って言えば魔術師たちの国だ。俺たちの国を切り離したのは魔術師なんだろ？」

「魔術師たちも、あなたたち錬金術師たちが切り離したと思っているよ」

「え？　お前……もしかして……」

「私は魔術師たちの住まう国の王子だ」

「てことは……」

一瞬間が空いてレアードは答えた。

「そう、世界は繋がったんだ」

ある日の朝、ある国の国王陛下と妃が朝食の席に着いていた。いつも通りの豪華な食事が彼らの目の前の大きなテーブルにところせましと置かれている。

「レアードはどうした？　まだ起きてこないのか？」

国王は少し不機嫌そうに言った。

「しかたありませんわ。ここのところ少し疲れているようでしたし」

コンコン

「お食事のところ失礼します！」

取り乱した使用人が部屋に飛び込んできた。

「なんだ騒々しい」

「申し訳ありません。ですが、レアード王子が……！」

「レアードがどうした？」

「レアード王子が消えてしまわれました。城内をくまなく探してもどこにもいらっしやらず、警備の者も外には出ていないと言っております」

国王は立ち上がり窓から外を見まわし、何かを見つけると笑みを浮かべ拡声の魔術を使った。

「ようやくこの時が来た。今こそ例の計画を実行する時が来たのだ。全員、行動を開始せよ。計画について知らされていない者は待機とする」

国王の声が城内に響き渡り、城内は奇妙な活気に包まれた。妃と使用人たちはただ啞然としていた。

ゲオルグは授業が終わるとすぐにフラメルに駆け寄った。

「フラメル先生、ヘルメスのことで相談があるのですが」

「どうした？　そういえば今日は休みのようだが。奴がいないと授業も平和に終わるな」

「昨日の帰り道に僕と森で別れてから家に帰ってないらしいのです。一緒に探してもらえませんか？」

フラメルは古い本を取り出し何かを調べてからゲオルグを品定めするように観察した。

「ついてこい、ゲオルグ。ヘルメスについて心当たりがある。少々

面倒なのでお前の力を借りたい」

「わかりました」

フラメルの狂気を帯びた目に気づかずには彼は即答した。

第四章 謎の男

第四章 謎の男

ヘルメスは目の前の少年に告げられた仮説を信じるべきかどうか決めかねていた。

（俺と瓜二つの顔、威張りくさった口調、見慣れないけどなんか派手で高そうな服。うん、こんな奴があゝの国にいたらさすがに気付くな。てことはやっぱりこいつの言った通りか……）

「名前は？」

「へ？」

ヘルメスが考え込んでいる間にレアードが質問してきた。

「だからあなたの名前は？」

「ああ、名前ね。俺はヘルメス。お前は？」

「レアードだ。ヘルメス、私と共に国王に謁見してほしい。世界が繋がったことを報告するための証人としてね」

「え？ 腹減ったから帰りたいんだけど」

「だったら城で食事を出そう。わが国で出せる最高の食事を……つて、え？」

レアードの話の途中でヘルメスは歩きはじめた。

「なにぐずぐずしてんだ？ さっさと行くぞ」

（この者は、おいしいものを食べさせてあげるといったら初対面の者についていくのか？ 話が早くて助かるが、なんだか誘拐しているみたいでいい気はしないな）

レアードがそんなことを思っていると地響きが鳴った。どうやら前後から何かの大群が凄まじい勢いで彼らに迫ってきているようだ。

「ふたりとも、そこを動くなよ」

どこからか男の声が聞こえ、二人が返事をする間もなく彼らは光に包まれた。

やがて光が収束すると地響きは聞こえなくなっていた。

「はじめまして、ふたりとも」

先ほどの声の主がどこからか急に現れた。その者は、見るからに異国の者と思われる格好をしていた。

ヘルメスとレアードは次から次へと起こる事態についていけないようだった。

「混乱しているところ悪いが時間がないので手短に説明させてもらうよ。まずはこれを見てくれ」

ふたりの前に無色透明の球体が差し込まれた。その球に少しずつどこかの風景が映し出されていく。

「これは先ほど聞こえた地響きの原因の一つだ」

そこには火を吹く竜や雷雲をまとった獅子などの大群がいた。

「こいつらは魔獣じゃないか！ 数百年姿を見せなかったこいつらがなぜこんなに……」

レアードは驚きの声を上げた。

「これがもう一つの原因だ」

球体に別の場所の風景が映し出された。

「こいつらは……ホムンクルス！ 生命を創り出すことは禁じられていたはずなのに、どうして……？」

ヘルメスもレアードと同じように驚きの声を上げた。

「簡単なことだ。まず魔獣だが、その名の通り魔力を持った獣のことだ。つまり獣に魔力を持たせてやれば魔獣の量産も可能だ。ホムンクルスに関しては禁忌とされていただけだ。誰かが秘密裏に創り出したんだろう」

「……魔力を、持たせる……？」

「妙な期待をするな、レアード。魔力を持たないものに無理に与えれば体に変化する。獣たちと違い人間の体はその変化に耐えられない」

「なぜ私の名を……！ それに私に魔力がないことまで……あなたはいったい何者なのだ？」

レアードは警戒を強めながら聞いた。

「わが名はミチヒサ。おそらくは君たちの味方であろう。すまないが今はこれだけしか言えないな」

「おそらく？」

ミチヒサの言葉を聞きヘルメスが聞き返した。

「君たちの意思次第では我と敵対することもあり得るということだ。君たちが平和を望むか、戦を望むかのな」

「じゃあさっきのホムンクルスたちと魔獣とかいう奴らって、まさか……」

「戦のために生み出された兵器だ」

「いったい誰がそんなことを……」

ヘルメスは考え込んだが、すぐに助けを求めるかのようにレアードを見た。

「ひとりではあれだけの数は生み出せないだろう。おそらく強大な権力を持っていて優秀な人材が多く集まる場所にいる奴らだ。もしかしたら優秀な者たちの入れ替わりも頻繁かもしれないな。全員が従うとは思えない……」

少し悲しげな表情でレアードはそう答えた。

「入れ替わりが頻繁……？　　そういえばケガを負ったぐらいで先生が変わるのはおかしいな。代理として一時的に変わっているわけではないし。……ってことは俺の国の黒幕は学校か！　お前の国はどうだ？　レアード」

「考えるまでもない。こんなことをできる権力を持っているのは国王陛下ただ一人。つまり私の父だ」

「え……？」

ヘルメスは驚きと戸惑いの混じった声を上げた。

「さて、そういうことで二人には二つの選択肢がある。我と共にこの戦いを止めるか自国に帰って国の味方になるのか。脅迫するつもりはないが後者を選んだ場合、障害となる可能性があるので事態が収拾するまでわが管理下に置かせてもらおうがな」

「なぜ私たちを協力者に選んだのだ？」

「優秀な錬金術師と魔術師が適していると判断しただけだ」

「おいしい、俺は錬金術師の落ちこぼれだぞ」

「私に魔力がないのを知っているのだろうか？」

ミチヒサの答えに二人が反論する。

「そんなことは知っている。我が借りたい力はヘルメスの魔術師としての力とレアードの錬金術師としての力だ」

「どうということだ？」

「ヘルメス、君は錬金術を行っている時に突然器材が爆発するだろう。それは君が元素を扱えない体質であることと無意識に発動してしまう魔術が原因なんだ。レアード、君の物事への探求心は錬金術師にとって必要不可欠のものだ。おそらく君は元素を扱える。どうか？」

二人は戸惑いながらも力強く頷いた。

第五章 疾風の同志

第五章 疾風の同志

翌日、ヘルメスは朝日と共に目覚めた。大きな欠伸をすると彼は昨日のミチヒサの話を思い出した。

彼の話によると二つの国の空間は一時的にミチヒサが繋げたもので、現在はまた空間が隔離されて戦争はまだ起こっていないがおよそ二週間後には空間を隔離していた力が消滅し、争いが始まるだろうということだった。

（期限は二週間……それまでに魔術を使いこなせ……か。そういえば俺の特訓に付き合ってくれる人が来るって言ってたけど……）

ヘルメスはあたりを見回したが見えるのは木々ばかりだった。

（リードはミチヒサと別の場所で特訓だし。俺……もしかして独りで……？）

ヘルメスがそう思い前を向いた瞬間、音もなく一人の男が現れた。男は目以外を黒の布で覆い、見るからに身軽そうで気配がなく、今にも木々の影に同化しそうであった。

「遅れたようで申し訳ない。拙者……いや、私はシュンゾウと申す。かつて忍びであった者だ」

「シノビ？」

「忍びとは君主に仕え密偵、暗殺等を行う者たちだ。どうやら私の一族は滅びてしまったようなので、私はもう忍びではないがね」

「そうなのか。ところでそれは？」

ヘルメスはシュンゾウの後ろに置いてある二つの大きな袋を指さして尋ねた。

「ああ。これは君の特訓用に連れてきた魔獣とホムンクルスだ。実は今日遅れてしまったのはミチヒサ達にもこれらを届けたからなんだ。忍術でこいつらを無力化するのに少し手間取ってしまっただけ」

「えっと、空間って切り離されているはずじゃ……どうやってここに来たんですか？」

「確かにそうだが、私は小規模で短時間ではあるが空間に影響を与える術を使えるから切り離されていても行き来できる。ミチヒサに魔獣やホムンクルスの大群の映像を送っていたのも私だ」

一呼吸置いてシュンゾウが話を続ける。

「さて、我々には時間がない。この二週間で君には一人で一国と渡り合える魔術師になると同時に、それに見合う武器を作ってもらわなければならないのだから」

「え？　そこまではさすがに無理じゃないですか？」

「君なら不可能ではない。無論容易ではないが。それに一つ言っておくと私とミチヒサは君たちのサポートしかしない。国の首領を討ち取るのは君達でなくては意味が無いからな」

「なぜです？　誰が止めても同じでしょう？」

「例えばの話だが……君が誰かと道端でケンカしていたとする」
「うん」

「そこに見ず知らずの人が急にやって来て君らを殴り飛ばした。果たしてそれでケンカが収まるか？」

「なるほど。一時的にしか収まらないな」

「その可能性が高い。外からの力ではなく内からの力で止める必要があるんだ。わかったらさっさと訓練を開始するぞ」

「ちなみに俺達ができなかったらどうするんだ？」

「その時は」

シュンゾウは威圧を放ち静かに告げた。

「両国を滅ぼすだけだ。鍊金術と魔術は他国にとってそれほどまでに脅威なんだ」

その言葉でヘルメスの顔つきが変わった。

一時間後、森の中を三つの大きな火球が凄まじい速さで、しかし無数の木々にかすることすらなく飛び回っていた。

「ヘルメス、訓練開始から一時間経過、休憩の時間だ」

シュンゾウが声をかけるとヘルメスは火球を消滅させて木に寄りかかるようにして座った。

「シュンゾウさん、どんな感じですか？ 俺の魔術の成長は」

「すごいな。正直ここまで才能があるとは思わなかった。私個人は君たちに任せるのは無理だと思っていたがこれならば可能かもしれない」

シュンゾウの言葉を聞くとヘルメスは苦笑いに似た笑みを浮かべた。
「どうした？」

「いや、人に褒められたのって初めてだからさ。嬉しいような気恥ずかしいような感じでね」

「喜ぶのは構わないが期待をされるといいうのは良いことばかりではないぞ」

シュンゾウは楽しそうに言った。

「どういうことさ」

「次からは魔術の訓練と実戦に対しての訓練を同時に行う。戦闘の中で新たな術を身につける」

「そんな急には無理だろ。さっきの魔術では全然戦えないっていうのか？」

「火は熱を放出するだけの基本的な術なんだ。それ故に対策もされやすい。それと強い術を使っても実戦経験がなければ勝つことは難しい。何度も言うが君には時間が無いんだ」

「わかったよ。あいつらと戦えばいいんだな？」

ヘルメスは魔獣とホムンクルスの袋のあたりを指さした。

「いや、あいつらは手加減しないからな。相手は私だ」

「シュンゾウさん？ 危ないんじゃない？」

「大丈夫だ。手加減はする」

「そうじゃなくて、シュンゾウさんに魔術を使うなんて……」

「問題ない。やってみればわかるさ。武器はとりあえずこれを使え」
シュンゾウはヘルメスに短めのよく手入れされた古い剣を渡した。

「魔術で戦うのに剣が要るんですか？」

「敵の攻撃を防ぐときに使う。それと魔術を使うときに、武器に魔力を経由させると威力が増し、コントロールもしやすくなる。さて、そろそろ始めたいんだが……」

「わかりました。よろしくお願いします」

森の中に金属と金属のぶつかり合う音が響いている。ヘルメスはギリギリのところでシュンゾウの攻撃を受けていたが、放たれた二連撃を受け切れずに転倒してしまった。

「受けているだけでは駄目だ。それに魔術を使わなければさつき練習した意味がないだろう」

「ちよつと、攻撃が速過ぎだって。俺は戦いなんてケンカくらいしかしたことないんだぞ。初めはもう少し加減してくれよ」

「しかし私の身体能力ではこれくらいの加減が限度なんだが。私は生まれた瞬間からあらゆる技術の訓練を受けていたからな」

（俺の動きのどこがダメなんだ。たしかに速いが見えないスピードじゃない。シュンゾウさんと俺の違いは……。身体能力か、経験か、才能……）

シュンゾウはヘルメスの考えを見抜いたかのようなタイミングで再び話し始めた。

「お前は下半身が不安定すぎるうえに攻撃を受ける際に反射的に目を閉じている。軸となる片手も中心から大きく外れているうえに……」

（あれ？　なんで俺は……）

「……魔術を使う機会は自分で作らなければダメだ。相手がそんな隙を見せることを仮定した訓練では……」

（魔術では落ちこぼれじゃないはずなのに……なんでこんなにボロクソに言われているんだ？）

ヘルメスに怒りに似た負の感情が沸々と込み上げてくる。

「……いいか？ 攻撃は斬撃も術も真正面ではなく受け流すように力を分散させ……」

「うるさい！ 俺はあんたとは違って普通の、ただの子どもなんだ！ そんなに急に強くなれるわけないだろう！」

ヘルメスはいつの間にか沈みかけた太陽とは反対の方向に歩きだした。

「どこへ行く？」

「疲れた、少し休む」

少しずつ暗くなる森の中を指先に小さな火を灯しながら歩いた。

ヘルメスが目を開けると日はすでに沈み、空には星が煌めいていた。遠くの方から鋭い空気の乱れる音が聞こえる。どうやら彼が目覚ました要因の一つはそれのようだ。

（俺、眠っちゃったのか。それにしてもこれは何の音だ？）

ヘルメスは大きな欠伸をしながら音のするほうへ歩き出した。

やがて月明かりに照らされた少し開けた場所が見えてきた。音が大きく聞こえてくるにつれそれが一定のリズム、一定の音量であることに気付いた。

音の中心にはシュンゾウがいた。彼は二メートルほどの丸太を握れるように加工したものを使い素振りをしていた。

（すごい……）

「シュンゾウさん、なんであんたがこんなことを。そんなに強いならいまさら鍛える必要はないだろう」

「幼い頃からの日課なんだ。最近は訳があってできていなかったがな。それに相手は錬金術や魔術の国だからな。君らのサポートか、

あるいは両国を滅ぼすにしても鍛えすぎということはない」

（そうだ。いくら強くても十分なんてことはないんだ。それなのに俺はすぐに上達しないからってアドバイスも聞かずに八つ当たりして、訓練を放り出して……。自分の国の問題なのに……。俺は、最低だ……）

「シュンゾウさん、図々しいとは思いますが訓練の再開をお願いします」

「休憩はもういいのか？」

「はい」

ヘルメスの訓練は連日深夜まで行われることとなった。

第六章 錬金の剣

第六章 錬金の剣

レアードはミチヒサが用意した森から少し離れた山のふもとの小屋に、彼と共に向かっていった。沈みかけた太陽が空を黄金色に染めている。レアードは錬金術という学問との新たな出会いに心を躍らせていた。

「無から有を創りだす学問」や「人が神を越えようとする学問」など彼の認識している錬金術という学問は、これまでに学んできた数学や歴史などとは比べ物にならないほどに彼に知的興奮を与えた。

「そういえば錬金術はあなたが教えてくれるのか？」
走りながらレアードは尋ねた。

「いや、我は錬金術については無知だ。君には独学で学んでもらわなければならない」

「どうやって？ 錬金術師たちとは長い間交流が途絶えていたのだから私も錬金術については何もわからないのだが」

ミチヒサはレアードに古びた一冊の本を渡した。

「錬金術についての資料は山のようにある。それに学ぶ上で役に立つであろうメモもな。今持っているのはその一冊だけだが用意した小屋にはそれらと実験器具や材料なども置いてある」

「あなたにも疎遠な錬金術に必要な環境がそこまで整っているのは不自然ではないですか？ 何が必要なのかわからないだろうに」

ミチヒサは困ったように苦笑いしながら答えた。

「いずれ我らの事情を話す。それまではどうか我らを信じてほしい」
レアードは頷くと先ほど渡された本を目を輝かせて読みながら走った。

ミチヒサが用意した小屋は予想に反して素晴らしい環境だった。まわりには数種類の果樹やハーブなどが生えており近くには透明度の高い川が流れている。小屋もそれなりに大きく、古い造りではあるが新築のように綺麗だった。

「すごい……。この小屋は一体……？」

「錬金術により作られた『不朽の小屋』だ。数百年前にある錬金術師が研究所として建てたものだ。その目的ゆえに周りに材料が富んでいるこの場所が選ばれたのだろう。あの山には役に立つ鉱石が多く存在するらしい」

レアードは小屋の中に入り、中のモノには見向きもせず机に向かい本の続きを読み始めた。

「中を見て回らないのか？」

珍しい道具や材料、本の山に飛びつくだろうと思っていたミチヒサは、レアードの意外な反応に驚いた。

「今見まわっても何もわからないだろう。まずはこの本で基礎を身につける。時間が無いからこそ慎重に、確実に……」

「そうか、立派な心がけだ。では我は足りないと思われる材料を集めてくる。君には実戦訓練もしてもらわなければならない。さて、何日後に始めようか」

「そうだな……。一週間後……」

本を読みながら考え込む。新たな知識を得ながら物事を考えることは決して容易ではない。

少し考えた後レアードは口を開いた。

「メモは他にもあるのか？」

「ここにある本にはすべて挿入であるはずだ」

レアードはまた少し考え込む。

（このメモがあるならば……）

「よし、実戦訓練は三日後で頼む」

「……わかった、三日後だな」

ミチヒサが小屋を出ようとするレアドが引きとめた。

「ちょっと待った」

彼は本の山から鉱物図鑑を取り出しメモを抜き取り、索引欄に二つの印をつけた。

「材料採取に行くならこれとこれもお願ひしたい」

彼の自信に満ちた目と笑みは、速くも錬金術を理解し始めたことを主張していた。

日が完全に沈み夜になった。古びた小屋の中に聞こえるのはフクロウの鳴き声、夜風の音、そしてレアドの本を捲る音。彼はミチヒサが出かけてから数時間、手、瞼、眼球以外は微動だにせず、瞬きすらも煩わしいようで眼は乾燥して充血している。

やがて本を読み終わると静かに目を閉じて本の内容を思い返す。目の充血や疲れのためか涙が少し眼にたまる。その後一分ほど眼を開けてまだ読んでいない本の山から一冊の本を選び器材のところへ向かった。

（基礎と趣旨は理解したはず……。後は本を読みつつ実際に術を使い、応用と慣れを身につける）

初めて行かう錬金術に心を躍らせ材料を手にとることに気がつく。

（ここにある大量の材料……。最近収集したものだ。判別の難しいモノもある中これだけの量を集めたのか……。私も頑張らねば……。そういえばこの器具は随分と古いモノのようだが……。実験器具よく見るとすべてに共通の文字が彫ってある。

（ヘルメス・フラメル……。偶然なのか、それとも……。いや、考えても仕方のないことだな）

レアドは黙々と作業を開始した。とても初めてとは思えない素早い手つきで作業を続けていると、彼の顔には自然と笑みが浮かん

できた。

（楽しい。いや、嬉しいのか。落ちこぼれではない、才能があるのが自分自身でもわかる。ふふ、しばらく眠ることはできそうにないな）

三日間その小屋から音が途絶えることはなかった。

朝日が昇るとほぼ同時にミチヒサが帰ってきた。どのように運んで来たのかわからないが、大量の材料を小屋の外に山積みにした。

彼は二つの鉱物を他の材料と区別して置きレアードのいる小屋に入った。

「調子はどうだ、レアード。区切りのいいようならば実戦訓練を始めるが」

そう言いつつミチヒサはレアードの創りだした道具の数々を見て内心驚いていた。

（この短時間でこれだけのモノを創り出したのか……）

「今から始めても大丈夫だ。三日後というから私は昨晚には一区切りつけていたのだが。眠る時間と新しい本を読む時間が得られたので悪くはなかったが」

「すまない。初めての訓練は夜に行うには効率が悪いと思ったのである」

「いや、そうだろうと予想はしていた。さて、さっそく訓練を頼む」
レアードは本の読んでいたページに例のメモを挟み立ち上がると外へ出た。

「まず説明をする。我は実戦についてあえて君には知識を叩き込まない。戦いは考え無しにするものではないが、考えすぎても良くないからな。したがって実際に戦いながら戦闘経験を積んでもらうわけだ」

「わかった。それでしばらくの相手はあなたなのだろう？ あいつらではなく」

レアードはシュンゾウが持ってきたホムンクルスと魔獣が入っている袋を指さした。

「そうだ。それで武器だが……」

「それなら心配は要らない。昨晚作っておいた剣がある。試作段階な上に材料も足りなかったのだから改良すべき点が多々あるがな。それと剣術については経験もある。だから基礎の基礎については説明しなくても良いだろう」

そう言うレアードはどこからか剣を取り出してみせた。

「その剣は……。もしや……」

「錬金術で作る剣ならばこれしかないだろう。伝説の剣、アゾットだ。残念ながら今は一部の力しか使えないが最終的にはオリジナルを超えた剣にしてみせるさ」

握りの上下に二つの穴を持つ剣は、陽光を反射し銀色に煌めいていた。

第七章 歴史語り

第七章 歴史語り

訓練開始から数時間が経過し、空には赤と紫の世界が広がっている。

（基礎の基礎を教える必要はない……か。大した自己分析だ。過大評価でも過小評価でもないな）

銀色に輝く剣がレアードの頬を掠める。独特の形をしたその剣は彼に反撃の隙を与えずに突きを繰り返す。剣の主は両手両足に相当な量の重りを着けた上でさらに手加減しているようだ。

「はあっ！」

レアードは気合いと共にミチヒサの突きを刀身でいなし、そのまま斬撃に転ずる。

しかしその攻撃をミチヒサは剣で弧を描く様に弾き、生じた遠心力を長い柄でレアードの肩に叩き込む。

「つうっ……！」

「休憩だ」

ミチヒサは衝撃で転倒したレアードの喉に剣を突き付けて言った。

（そういえば不思議な形の剣だな、ミチヒサのは。かつて本で見た異国のナギナタに似ているような……。しかし刃も切先も丸くて切れ味が悪そうだな）

「どうした？」

「それがナギナタというものか？」

レアードはミチヒサの銀に輝く剣を指さして言った。

「いや、違う。これは夢幻の剣というものだ。一部では天邪鬼の剣とも言われていて、剣の持ち主に応じて形や能力を変える。強い者が持つと弱そうに見えるようになり相手を油断させ、弱い者が持つと強そうに見えるようになり相手に威圧を与える」

「そんな珍しい剣を持っているあたり、やはり只者ではないな。今から休憩なのだろう？少し話が聞きたいな、あなた方に関しての」

レアードは探るような鋭い眼をミチヒサに向けながら、喉に突き付けられた剣を慎重に払い立ち上がった。

「ふむ、まあいいだろう。一つ言っておくと我々にも把握できていないことも多く、また知っていることの全てを話すことはできない。それでも良いか？」

疑問を問いかけてはいるが後半部分に関しての反論は受け付けられないといった口ぶりだ。

「まあいいさ。あなたにもプライバシーはある」

「その言い方は酷いな。事情を話すのは戦う君らには知る権利があるということの他にもう一つ、君が錬金術を学ぶ上で役に立つであろう話だからだ。故に訓練に値すると判断し、今日の実戦訓練はここまでとする。さあ、小屋の中に入るぞ」

二人は剣を収めて小屋に入り、蠟燭を灯した。

火と共に二人の巨大な影が揺れる中、レアードは小屋の中に貯蔵してあるパンを引っ張り出して頬張りながら話を聞くことにした。レアードはミチヒサにも勧めたが、彼は断り話を始めた。

「我とシュンゾウは東洋の、ニホンという国からここに来た」

「たしかニホンというのは、黄金の国ジパングだったか？」

「いや、確かにそうだが黄金の国というのは違うな。まあその噂は根も葉もないわけではないが……。さて、まずは我々がここに来た訳を話そう。遙か昔、神秘の力により栄えた国があった。その国の人々は競うように神秘の力についての研究を行い、それを二つの術に分けた。それが錬金術と魔術だ」

「ちょっと待て」

二つ目のパンをかじりながらレアードが口を挟む。

「錬金術と魔術は一つの術だったというのか？」

「そうだ……とは言っても通常では起こり得ない現象を引き起こす力をまとめて呼んでいただけで、性質が同じだったわけではないが……。話を続けて良いか？」

「どうぞ」

レアードは三つ目のパンに手を伸ばす。三日間ほとんど飲まず食わず徹夜で錬金術に没頭した後、そのまま剣の稽古をしたためにレアードの食の勢いは止まらない。

「術が二つに分かれると術者も二つに分かれる。そして人間の思想が二つに分かれ、やがては国すらも二つに分けた。そうして出来たのが君達の国だ」

ここでミチヒサは一息つき、肩の凝りをほぐすように首を左右に倒す。

「それでな、二つの国の国境に一つ、どちらの国にも属さない村が出来たんだ。その民は錬金術と魔術、どちらを学ぶか選択することが可能で、当時唯一、二つの術が共存していた場所だった。そしてその村のある夫婦に双子が産まれた。彼らは成長すると一人は錬金術を、もう一人は魔術を学ぶことにした、自分達の村のように二つの術の共存を目的として。二人は天才だった。彼らは十年でそれぞれの術を飛躍的に発展させ、国のトップとして二つの国の関係を良好にした……いや、したはずだった。彼ら以外の権力者はトップの手前、表面上のみ良好な関係を取り繕い、裏では互いの国の侵略計画を進めていた。理由は恐らく自国の術こそが何よりも優れていると証明しなかったためだろう……もともとはそれが理由で分裂した国だからな。彼らはその計画を察知し、争いや他国侵略を防ぐために二人で空間を切り離すことにした。その後彼らは世界を回り歩きニホンにたどり着き我らと知り合いになり、今の話を聞いたんだ。黄金の国の噂は彼らが金を生み出したのを見た異国の者が伝えた話が誇張されたのだろう」

「おい、嘘をつくな。年齢から考えておかしいだろう。空間隔離を

行った五百年前の人物と知り合いの者が生きているわけがない」

レアードは手に着いたパンくずを払い落とし、ミルクを口に流し込む。
「ああ、それは彼らの力さ。我には詳しいことはわからないが人間のある瞬間をデータ化し、保存するという装置を創ったそうだ。ただ装置の限界で何回も使えるわけではなく、また人間の限界で一度使えるかどうかわからないような危険なものらしいがな。だからデータである我々は食を必要としないし、過去の人間そのものであるから歴史事情にもそれなりに詳しいということさ」

「信じ難い話だな……。ところで隠しているのはそれだけか？」

「最初に言った通り全ては話せない。現時点で話せるのはこんなところだ。続きはまた今度にして今夜はゆっくり眠ってくれ」

レアードは頷き横になり、十秒ほどで眠ってしまった。

静かな夜に銀の刃が空を切る音のみが響いていた。

第八章 穏やかな時間

第八章 穏やかな時間

ヘルメスとレアーデ、二人の出会いから十二日の時が流れた。

彼らは戦闘訓練とそれぞれの術の訓練をその短期間でこなし、二人は成長した姿で再開した。

「前にも思ったことだがまるで鏡を見ているようだよ。眼や髪の色は違うが、双生児よりも近似しているのかもしれない」

レアーデは開口一番にそう言った。

「まあお前の方が俺より傷だらけだけどな」

ヘルメスは傷だらけの顔に笑みを浮かべてそれに応える。

恐らく冗談を言ったのがヘルメスでなければレアーデは無視していただろう。たった数時間しか一緒にいなかったヘルメスは彼にとって、何年も共に過ごした自国の人間の誰よりも特別な存在となっていた。

「当然だ。私は君よりも厳しい訓練を受けたのだからな。それはもう傷だらけだとも」

生まれて初めての冗談、それと満面の笑顔はどちらも少しぎこちなかった。

「うっ……。いや、俺が言ってるのは見える部分のことで服の中はきつと俺の方がボロボロだぞ」

「まあ私は成長が早かったのでケガは少ないかもしれないな」

「さっきと言ってることが違うじゃないか！」

どちらからというわけでもなく二人は笑い出す。

穏やかな時間だった。数日後に戦争を控えていることなど感じさせず、ずっと続くのではないかと錯覚させられる。

「しかし他愛のない雑談が楽しいものだなって、知らなかったな……」

レアードが寂しげな表情でポツリとつぶやく。

「親や友達とはこんな風に話さないのか？」

「父上も母上もそんなに親密に接してはくれない。それに私の国では子どもたちは皆、魔術で遊ぶからな。魔力が無く、それを王族の威厳を保つために民に隠さなければならぬ私には友達などいなかった」

「そっか。じゃあ戦争を止めさせて平和になったら俺がお前の今までの人生分、話に付き合うぜ」

一切の負の感情を浄化させるような無垢なる笑顔を放ち、ヘルメスは告げた。

（同じ顔なのに私にはできない表情だな。こんなにも自然な笑顔は初めて見た。使用人たちの作り笑顔とは全然違う……）

「どうした？」

「いや、それは楽しみだなと思って。ところでヘルメスには友達がいるのか？」

「ああ、俺も落ちこぼれで友達は少ないけど学年一頭の良い親友がいる」

ヘルメスはレアードの反応を予想していた。恐らくは「学年一頭の良い」というフレーズに興味を示すだろうと。

しかしレアードは彼の予想とは異なる反応を示した。

「そうか。ヘルメスの親友か……。会ってみたいものだな」

頭の良いという台詞には微塵も反応せず、代わりに親友という言葉に眼を輝かせた。

「それなら戦争なんてさっさと阻止して三人で遊ぼうぜ。なんせ奴は学校一頭が良いからな、気が合うと思う」

「勉強ができるかどうかなど、どうでもいいことだ。だが君の親友なら気が合うと私も思う」

レアードの心は今までのどんな時よりも穏やかで清々しかった。会話するだけで楽しい気持ちになれる。それがヘルメスの魅力であり、彼の親友もそんなところに惹かれたのだろうとレアードは一人

思っていた。

二人が三十分ほど会話をしているとミチヒサとシュンゾウが二人揃って森の奥から姿を現した。彼らは両国の現状調査に出かけており、その間にヘルメスとレアードが会話をしていたのだ。

「お、早かったな」

「それで、やはり戦闘態勢に入っていたのか？」

東洋の服を着た独特の形状をした身の丈ほどもある大剣を携えた男と、全身をほとんど黒い布で覆った痩せ型の身軽そうな男の姿を認めると、ヘルメスたちは会話を中断し、二人に駆け寄った。

「ああ。空間の境界線である例の森付近にはすでに軍隊が待機している」

「これから私とミチヒサは警備に入る。お前たちに教えられることはすべて教えてきたつもりだ。残りの二日間はそれぞれ自主訓練に励んでくれ」

そう告げると二人は踵を返し歩き出そうとした。

「おい、術が解けるのにあと二日あるんだろ？　もうちょっと稽古付けてくれよ」

「五百年も二つの国の空間に効果を及ぼすような術だ。誤差が出る可能性が極めて高い。術者の話によると予定との誤差は二日前後らしい」

「誤差二日でも驚異的なことだ。我等は開戦と同時に君らを呼び、敵将以外を出来る限り多く食いとめる。それまでにもう少し腕を磨いておけ」

「わかった」

二人揃ってコクンと頷く。

「ああ、それと」

ミチヒサが去り際に付け加える。

「ヘルメスは魔術の国の将を、レアードは錬金術の国の将を頼むぞ」
「え？　なぜだ！　私の父が原因なんだ。私が父を討つ！　決意は固い、情は掛けない！　だから……」

「いや、魔術を打ち破るのは魔術でなくてはならない。錬金術も同様に……。そういうことだ」

レアードが反論する間もなく彼らは去って行った。

「なあ、そんなに自分の手で父親を倒したいのか？」

「……この戦争は複雑なんだ。私たちの行動に対して国民がどう思うのか、それがカギとなる。そしてどの行動をとろうともリスクを負うこととなる」

重々しく語るレアードの話を、ヘルメスはかつてない真剣さで聞き入っている。

「先ず私たちが自国と戦ったとしよう。私たちは彼らの目にどう映るのか。無論、戦争を止めるために立ち上がった少年のようにも見える。だが少し見方を変えればただの反逆者、それも戦争の相手国と同じ術を使えば裏切り者だと思われる確率が高い。加えて私の場合は王権を継ぐために父を殺したように見えるかもしれない」

レアードがヘルメスをチラリと見ると、話の一区切り毎に頷いている。

「次に私たちが他国と戦った場合だ。いくら同じ術を使うといっても所詮は相手国の人間だ。戦争においての敵戦力に見える可能性が高い。それでは戦争に加担しているも同じだ」

「それで、お前はどっちが低リスクだと思うんだ？」

レアードが話し終えると同時にヘルメスが質問する。

「……後者の方だ。相手国の者だと明らかにするとは限らないからな。その場合でももちろんリスクはあるが……」

「それでもお前は最初に言った方が良いと？」

「……ああ。やはり父親の過ちは私の手で正したい。たとえこの手で殺めることになろうとも、王家の血の誇りに賭けて……」

それだけ言うとレアードは押し黙ってしまう。その間、ヘルメス

は顎に手を当て、軽く目を閉じながら何か考え事をしていた。

「なあ」

数分後、ヘルメスが目を開けてレアードに話しかける。その眼には強い光が宿っているように見えた。

「なんだ？」

「良いこと思いついたんだけどさ、聞く気ある？」

レアードは自分そっくりのその顔がつくる表情を見て思った。

（この顔には私も覚えがある……。これは確固たる自信に満ちた表情だ）

「聞かせてくれ」

迫る開戦の時、交わるモノは空間だけではないだろう。過去から来た者や争いを起こす者、従う者、抗う者。様々な人とその想いが決戦の地で激突することとなる。

第九章 開戦

第九章 開戦

ある朝、二人の少年はさえずる鳥の声で目を覚ました。五百年前に発動した術の自然解除が早まることはなさそうである。

目覚めた少年たちは、まだ半開きの目を擦りながら朝食を取る。

「ついに来たな、この日だ」

ヘルメスが口を開いた。

「確定事項ではないぞ。誤差というからには解除が長引く可能性もあるということだ」

レアードは欠伸をしながらそう答える。茶色の瞳からは涙が湧き出てきた。

少し雲が掛かっているものの、晴れた空には金色に輝く太陽が圧倒的な存在感で浮かんでいる。

ヘルメスの金色の髪は同色の日光を反射し、神秘的な輝きを放っている。

「うまくいくかな？ 俺の作戦は」

ヘルメスが伏し目がちに重々しく口を開く。その唇は乾燥しており、表情からは緊張の色が見て取れる。

そんな彼に……大切な相棒に、自分はどんな言葉を掛けてやれるのだろうか。

レアードは少し考えた後、語り始めた。

「……私は今まで、何かを信じたことが無かったんだ。伝承も、書物も、父上も母上も、そして自分さえも。学問ではあらゆる事象に疑問を持ち、全てを疑わなければならない。周りの人間は私と接する時、常に距離を置いていた。国で唯一魔術を使わない、使えない私を、彼らはどこか異端者を見る目で見ていたのかもしれない。そして、何も信じられない自分が、何よりも信じられなかった」

嵐の前の静けさだろうか。戦争を間近に控えたこの森は不自然なほど静かで、レアーダの声は何にも妨げられることなくヘルメスに伝わる。

「そんな中で私は君に出会った。私とは対照的な、無垢な心を持った君に……。私や、私が関わった者たちには心に裏が、汚れた部分がある。だからだろう、私が信じることができなかったのは。だが私は君のことは信じられる、君のことを。だから私は君の作戦も……信じている」

少し顔を赤くし、しかしまっすぐヘルメスを見て言った。今まで共に過ごした、数日間だが貴重な時間を与えてくれた彼に感謝の意を込めて。

すこしばかり照れているレアーダに、ヘルメスは元気に告げる。

「じゃあ、俺も信じるよ。俺が信じるお前が、信じてくれるこの作戦を」

二人の覚悟は決まった。後は開戦の時を待つのみである。

ヘルメスとシュンゾウは、元は国境であった森の木の上で、かつての友の術が五百年の時を経て解ける瞬間を待っていた。朝焼け後の金色の太陽が二人を照らしている。

「最後に見る朝日が綺麗で良かった。そうは思わないか？ シュンゾウ」

ミチヒサは穏やかな朝の空気に心を委ね、隣の友に話しかける。

「朝日など、任務に明け暮れていた私にはゆっくり拝む暇などなかった。故に、いつもより綺麗なのかどうかはわからない」

寂しさも切なさも浮かばない、ただ無表情な顔。

「それでもこの朝日は、綺麗だと思うだろう？」

「……綺麗だと思う感情など、私にはほとんど残っていないだろう。時を越える前の私は、それほど過酷な任務を繰り返していた。

そもそも私にとって朝日など任務終了の合図でしかなかった」

シュンゾウは過去を思い出したのか溜め息をつき、もう一度朝日を眺める。

「それでも……この朝日は悪くはない……」

黒い布で覆われたシュンゾウの口の端が、かすかに上がったように見えた。

二人はまばゆい朝日を少しの間眺めていた。

「……そろそろだな。彼らの予定した時間は」

太陽の高度を見ながらミチヒサが口を開くと、目の前の空間が振動したように見えた。

大地が音もなく揺れ、まるで真空中に空気が入りこむように強い風が吹き荒れる。数メートル先の景色がぼんやりと霞み、徐々に小さく、正確には遠くへと移って行く。

「準備はいいな？ ミチヒサ。戦闘開始前に両軍に致命的なダメージを与え、機先を制するぞ」

二人は木の上で飛び出す体勢を取る。

眼前に眩い光が広がり、空間がかつての姿を取り戻した。

「これは……。なんということだ！」

光が収まった後、二人が目にしたのは飛び交う炎やエネルギー体、対峙する雷雲を纏った獣と白と無色を基調とした人のようで、どこか違う異形のホムンクルス、そして殺し合う両国の兵士たちだった。すでに様々な生き物が、傷つき倒れている。

「シュンゾウ、作戦変更だ！ 我とお前はそれぞれリードとヘルメスを敵将まで護衛だ。こうなってしまうては戦いを最小限に留めるのは不可能だ」

「……了解。では彼らを迎えに行くでしょう」

激しい戦争を背にし、彼等は二人の少年の元へ向かった。

二人の少年が朝食を終えた頃、空間の境目の方向に強風が吹きこんだ。その風はあたりの木々を容赦なく揺らし、木の葉や石などを巻き上げる。

「さてと……準備は良いか？」

風が収まるとヘルメスが立ち上がり、屈伸をしながらレアドに問う。

「ああ、いつでも行ける」

レアドがそう答えると同時に、ミチヒサとシュンゾウが一直線に向かってきた。

「すまない！ 至急戦場に向かってくれ！ 奴ら、どうやったかは知らないが術が解ける前に戦争を始めていたんだ」

ミチヒサは若干の焦りを見せつつ二人の少年に告げる。

「レアド、我と共に来い！ 敵将まで援護する」

ミチヒサがそのままの勢いで黒髪の少年に向かって言うと、彼はコクンと頷いた。

「……ヘルメス、先に行ってる。私もすぐに行く」

シュンゾウは金髪の少年にそう言うと、ミチヒサの近くに歩み寄る。

二人の少年は、森の奥にそれぞれ向かった。

「いいのか？ ミチヒサ」

ヘルメスとレアドが去るのを見送ると、シュンゾウが口を開いた。

「何がだ？」

「とぼけるな。いくらそっくりだと言っても、髪や目の色を変えたくらいでお前が見分けられない訳が無いだろう」

「いいんだ、あれで。二人がそう決めたのならな」

ミチヒサは二人が去って行った森を眺め、微笑んだ。

「すべてはお前の望み通り……か？」

「いや、我らが友の……だ。そして、最後までそうさせてみせる！」

二人はそれぞれ武器を構えた。ミチヒサは等身大で薙刀の様な形状の大太刀を、シュンゾウは腕の長さ程度の刀を。

「ならば、彼らを死なせる訳にはいくまい。ミチヒサ、出るぞっ！」

ミチヒサがそれに頷くと、彼らは再び、戦地へと向かった。

第十章 人工生命

第十章 人工生命

黒く髪を染め、茶色のコンタクトレンズに似たものを着けたヘルメスは、レアードと別れ、一人で戦場を望んでいた。

立ち上る黒煙。ぶつかり合う二つの術。創られた生命と改造された生命の戦い。そして殺すこと、殺されることを恐れながらも、戦場に身を置き、殺し合う人々。

（あの中に俺の知り合いもいるのかな……）

ヘルメスは焼けた草木の臭いが漂う中、そんなことを思う。

「さて……ヘルメス。どうやら敵将は戦場に居ないようだ。学校に向かうぞ」

少し遅れて現れたミチヒサは、戦場を見るなりそう言った。

「おう……って、俺はレアードだ。ヘルメスじゃないぞ」

返事をしたが、ヘルメスは慌てて取り消す。

「いや、それはもういい。君達の選んだ道は、そう間違ったものではない。むしろ……」

ミチヒサの話の途中で、バチバチと音を立てた巨大な光が木々を薙ぎ払い、二人の元へ向かってきた。彼らを狙った攻撃ではなく、どうやら流れ弾の様だ。

ヘルメスとミチヒサは強く地面を蹴り、横っ跳びでそれを回避した。

「時間が経てば経つほど、状況は悪化しそうだな……。ヘルメス、行くぞ」

そう言うが早いか、ミチヒサは顔色一つ変えずに走り去る。一方でヘルメスは、訓練ではほとんど味わっていない生命の危機と、戦場の空気に若干の動揺を見せつつも、ミチヒサの後を追った。

戦争の轟音を傍目に、ヘルメスとミチヒサは森の中を、学校に向けて疾走していた。時折遠くで微かに聞こえる悲鳴が、ヘルメスの心を揺さぶる。

「ヘルメス、どうした？」

先ほどもスピードが若干落ちたヘルメスに、ミチヒサが訊いた。「戦場が気になる……というのもあるんだけど、なんだかおかしくないか？ 人目に付かず、本拠地に接近できるこの森が、全く見張られていないというのは」

二人が今いる森は、錬金術師たちの本拠地である学校のすぐ隣まで続いている。ヘルメスは自分達のように、魔術師たちが少数精鋭部隊でこの森を使って攻めてきていたら、錬金術師たちはどうするのだろうかと考えていた。

「まだまだ精進が足りんな。これくらいの気配を察知できないようでは……」

ミチヒサはそう言うと、大太刀で周囲の木を薙ぎ払った。

鋭利な切り口を残し、力無く吹き飛んだ木々の立っていたところに、複数の無色と白の無機質的な異形の生物の姿があった。

「……ホムンクルス……！」

今までに、ソレらを見たことが無い訳ではない。今まで、シュンゾウが送ってきた映像でも目にし、同じく彼が、訓練の際に拉致してきたホムンクルスとも対峙している。しかし、実際に向き合う複数のソレらは、ヘルメスに底知れぬ威圧を掛けた。……人工生命「ホムンクルス」……。人に近い、人に創られた存在。その異質な存在に、彼は若干の恐怖すら覚えた。

「生まれながらにして、知識を持つというのは本当のことだったか。身を隠し、待ち伏せができるのだからな」

ミチヒサがヘルメスの隣で呟く。再び周囲に気を向けると、わらわらとホムンクルス達が集まって来ていた。最終的には、三十体近い

ホムンクルスに周りを囲まれた形となった。

「我が片付けよう。君は敵将まで力を温存するんだ」

ミチヒサは、一歩前に踏み出し、ヘルメスを庇うような体勢をとった。それに対して、ヘルメスは背中を合わせる。

「半々にしようぜ？ 俺も準備運動したいしさ」

ヘルメスは、金属製の杖を構え、力を込めた。すると、杖の頭に紅蓮の炎が渦を巻き、炎の竜巻が形成された。

仕方ないな、とミチヒサが頷くと、ヘルメスは杖を己の前方に振りかざした。

「焼き尽くせえー！ー！」

気合いと共に放射状に放たれた炎の渦は、巻き込んだモノの中で、ホムンクルスのみを燃やしていた。

自在に手足を体のエネルギーで動かすように、イメージ通りに魔力を使い、魔術を発動させる。右腕を曲げたいと思えば、その通りに曲がるように、ホムンクルスだけを焼きたいと思い、その通りにする。

創られた生命たちは、焼ける臭いを発することも、断末魔の叫びを上げることもなく、ガラスの様に溶け、崩れていった。ソレらが焼けた跡には、初めから何もなかったかの様に、何も残らなかった。「禁忌の術……か。確かに、倫理的に正しいとは言えないよな……」
無から作り出された命は、果てる時に無へと帰るんだから……」

ヘルメスは、彼らを囲んでいた半数のホムンクルスを片付けると、横目でミチヒサの様子をうかがった。

（まだ……終わっていない？）

ミチヒサの前には、未だにホムンクルス達が居る。しかしソレらは、動く気配がなく、静止している。

「さて、先を急ごうか」

ミチヒサが大太刀の構えを解くと、残っていたホムンクルス達が、急速に風化した。

「これは一体……」

ヘルメスは驚き、ホムンクルス達を観察した。するとソレらの、人間で言う腹部に、同じ高さで線が刻まれているのが見えた。

「我が斬った。どうやら形を崩さぬように殺すと、無に帰すまで時間がかかるらしいな」

斬った本人が、興味なしといった感じで考察を述べた。冷めた眼差し、動揺の無い口調。

（相手がホムンクルスだから？ それとも……命を、奪い慣れているのか？）

ヘルメスの中で、先ほどまではなかった一つの疑問が渦を巻く。

（俺は、本当に彼らを信用して良いのだろうか？ 彼らの語ったことは、真実がほとんどだった。でも、だからこそ偽ることも、半端な情報で俺とレアードをコントロールすることも容易なはず……）
いつの間にか神妙な顔つきで考え込んでいたヘルメスに、ミチヒサが声をかける。

「どうした？」

一瞬の間の後、ヘルメスは答えた。

「いや、なんでもない……」

（俺は……何を信じれば良い……？）

二人は武器を手に、錬金術学校へと急いだ。

第十一章 魔力を持つ獣

第十一章 魔力を持つ獣

少し不自然な金色の髪、人工的な蒼の瞳。それらは短時間でレアードが創ったものだった。レアードは、そんなお粗末な変装が、彼らに通じるはずが無かったということを知っていた。ただ、見て見ぬ振りをされたことが疑問に残っている。

「シュンゾウさん、どういうつもりだ？ 私達に変装していること、気付いているのだろう？」

レアードは、自らその件について話を切り出した。

「どういうつもりなのだろうな。私には何もわからない。私はただ、役割を与えられ、それに従うだけだ。その命令の意図も、善悪も、私にとってはどうでもいいことだ」

シュンゾウがそう言うと同時に、彼等の前方から巨大な炎が無数の木々を薙ぎ払い、向かってきた。

二人はそれを、左右に分かれて回避する。

「レアード。そちらの二体、任せる」

シュンゾウはそう言うと、自身の腕の長さほどの刀を握り、五体の魔獣に向かって駆け出した。

「私が二体相手に対し、彼は五体相手か。二体でも、任せてもらえただけ良かったかな」

レアードは口の端を上げ、鋭い目つきを眼前の魔獣達に向けた。一体は、背中に水晶の様な氷柱のある青い虎。もう一体は、手足に炎を纏った大狸^{ゴリラ}々。

「さて、信頼には応えないとな」

レアードは、金の装飾がツタのように施された、銀の細い剣を構えた。その剣には、変わらず穴が空いている。

その時、虎が雄叫びを上げ、氷片の混じった吹雪を竜巻の様にし、

体に纏いレアードに跳びかかった。その竜巻に触れた草木は、接点
が砕け、そこから徐々に凍りついていく。

「なるほど。当たるとタダでは済まないな」

レアードは大きく跳び退き、距離を十分に取ると、懐から黄色く
小さい球体を取り出し、虎に向かって投げた。

虎の手前に落ちたそれは、落下と同時に爆発し、半径一メートル
程のクレーターを作った。

「まず一体。そして、もう一体！」

間を空けずに走り来る大狸々の炎を纏った拳を、体を捻りながら
回避し、深々と刃を敵の腹に突き立てた。

倒れた虎と大狸々は、光に包まれ、それと共に姿を消した。

魔獣は死した後、魂が自らの魔力に溶けて、世界を巡るとされて
いる。その詳細、例えば彼等は死んだのか、思考能力は残っている
のか等は、魔術師達にはわかっていない。それどころか、魂が魔力
に溶けるということさえも、この消え方を見た者の想像で、真実で
はないのかもしれない。

レアードは消えた魔獣の跡を見つめて、改めて自分達の無知さを
知った。

「やはり、個々の力ではホムンクルスよりも魔獣の方が強いな。個
体数では圧倒的にホムンクルスが上だが」

五体の魔獣を倒し、どれくらい待っていたのであろうか。いつか
らか木の上で観戦していたシュンゾウが、レアードに話しかける。

「先を急ごう、シュンゾウさん。敵将を討つのは、ヘルメス達とほ
ぼ同時でなければ、戦争の被害者が増えてしまう」

二人は森を駆け抜け、数体の魔獣や、数人の魔術師を蹴散らしな
がら、城へと急いだ。

「王子の偽者め！　ここから先へは通さんぞ！」

黒いローブを着た魔術師が五人、魔獣を一体ずつ従えて、街への入
り口を塞いでいる。街に入れば、宙に浮かんではいるものの、城は
目と鼻の先である。

彼等はレアードの髪や目の色が変装によって異なっているため、城に入りこませる敵国のスパイだと思っっているようだ。

「まったく。五百年間交流が無かったのに、敵国の王子の顔がわかる訳ないだろう。五百年、いかに民が怠けて生きてきたか、今回のことでよくわかったよ」

レアードは、黒く小さい球体を敵に向けて投げながら言った。

黒い玉は、魔術師達の近くに落ち、音も無く破裂する。すると彼等は、無抵抗にその場に倒れ込んだ。

その間にシュンゾウは、魔獣五体を風のように速く斬り捨てた。

「王や学者達は勉強に励んでいたみたいだな」

生み出された魔獣が消える姿を見て、シュンゾウは言った。その後、視線を倒れた魔術師達に移す。

「小型で広範囲、音も無しに眠らせる爆弾か。便利なものだな、錬金術とは」

「まだまだ使える道具は持ってきている。期待しててくれ」

レアードは少し誇らしげに言ってみせた。彼の服のポケットには、この戦いのために創っておいた錬金術の兵器が所狭しと詰まっている。

二人が街中を疾走し、宙に浮く城の下までたどり着いた時、シュンゾウはレアードに尋ねた。

「さて、あの城にはどうやって行くんだ？」

シュンゾウは巨大な建造物を見上げながら、レアードに訊いた。

レアードは慣れた足取りで、城の真下にある直径二メートルほどの幾何学的なレリーフに向かった。

「これに乗れば空間転移されて、城に行けるはずだ」

そう言いながら足をレリーフに乗せるが、何も起こらなかった。その後、何回か乗り降りしてみるも、結果は同じだった。

「理由はわからないが、どうやら機能しなくなったようだ。普段この装置を使うのは私一人だから、壊れても戦争には影響ないものな。修理する暇などないのか、気付いていないのか」

レアードはポケットから箒のストラップを取り出した。すると、それはすぐに実物大のものに変化した。

「後ろに乗ってくれ。飛んで行く」

レアードの言葉にシュンゾウはコクンと頷き、レアードが跨ったその後ろのスペースに、同じようにして跨る。

錬金術製の箒は、二人を乗せると空高く舞い上がり、城へと飛んで行った。

第十二章 裏切り

第十二章 裏切り

杖と大太刀……それぞれの武器を手に、彼等は巨大な、城の様な建造物の前に立っていた。その建物には、前までの賑やかなで楽しそうな雰囲気など微塵も残っていないく、禍々しい空気が満たされている。

少し前までは心地よかった風とその音も、今はもう冷たさと不気味な声にしか感じられない。

彼等が巨大な扉に一步、歩を進めた時、それはゆっくりと開いた。中からは外の風よりも妖しげな風が吹いてくる。

「気をつけろ、ヘルメス。誰か来るぞ！」

二人はグツと身構える。コツ、コツ、と足音を鳴らし、ホムンクルス達には無かった威圧感を纏い、ゆっくりと近づいて来る人影。以外にもそれは雰囲気似合わず、大きなものではなかった。

「やあ、ヘルメスか？ 心配したぞ。今までどこに行ってたんだ？」
見慣れた友人の姿。扉を開いて現れたのは、ヘルメスの友人、ゲオルグだった。

しかし、その表情には以前の様な明るさは無く、言葉にも抑揚がない。まるで、感情が欠落しているかのようだ。

「ああ、ちよつとな。お前こそどうしたんだ？ 全然元気が無いだろう」

「ちよつと疲れているのかもね。ところでそちらは？ 見ない顔だけれど」

ゲオルグの視線がミチヒサの方へ行った。それに対しミチヒサは怪訝そうな顔をし、黙っている。

少しの間後、ヘルメスが口を開く。

「この人は助っ人だ。この戦争を止めるために力を貸してくれるっ

ていう、凄い強い人なんだ。俺達はこれから学園長のところに行つて、この戦争を止める。お前も来るか？」

ヘルメスは人懐っこい笑顔でゲオルグに問う。

「ああ、いくよ。実は、僕は今まで監禁されていたんだ。戦争反対の意思を掲げたために。隙を見て逃げ出してきて、これからどうしようかと思っていたところだったから、ちょうど君と会えて良かったよ」

なおも無表情のゲオルグと、共に会えた喜びで笑顔になっているヘルメス。それと、終始訝しげな表情のミチヒサが、揃って学校の中に足を踏み入れた。

赤黒く長い絨毯の上を、ヘルメスとゲオルグにミチヒサがついて行く形で、三人は進行する。

「そうだ、聞いてくれよ。俺が錬金術を使えなかったのって、魔力のせいだったんだって。それでさ、練習したら魔術が使えるようになったんだよ。この戦争が終わっても、錬金術の学校には通えなくなるかな？」

身振り手振りを加え、楽しそうに語るヘルメスは、敵の本拠地の中だというのにまるで警戒していない。

「そうなんだ。魔術……へえ……」

この時、初めてゲオルグの表情に変化が見られた。歯をチラリと見せるように、口の両端を上げる。

「ならやっぱり、この国を裏切ったんだ……」

「え？」

ゲオルグは人形のように頭を高速でヘルメスに向けた。大きく開かれたその瞳には一切の光が無く、口だけが微笑を浮かべたまま凍りついている。

「気を付けろ！ ヘルメス！」

ミチヒサの叫び声と同時に、ゲオルグは隠し持っていた禍々しいナイフでヘルメスに斬りかかった。

ミチヒサは間一髪、大太刀の柄でヘルメスを突き飛ばし、事なき

を得た。

床を転がった後、ヘルメスはすぐに体勢を立て直し、杖を構える。

「何するんだよ！」

親友からの予期せぬ攻撃に驚き、腹を立てるヘルメス。しかし友の持つナイフを見ると、徐々に血の気が失せていった。

彼の手に握られていた黒と緑の混じった色のナイフは、勉強不足のヘルメスですら知っている禁断の武器「魔邪のナイフ」だった。それは切り口から熱に強く致死性の無い毒が入りこむと同時に、高熱が傷に与えられる。そして傷口が徐々に石化していくという、かつての錬金術師たちの拷問器具だった。

「何をする……？ それは君の方だよ。戦争を止めようなんて、愚かなマネをしようとするなんてね」

そう言うゲオルグの目からは、光が見えるどころか、全てを飲みこむ闇すら見えるようだ。

「ヘルメス、君には学が無い。だからわからないかもしれないが、技術と言うのは戦争と共に進化していくんだよ……命がけの研究によってね」

ゲオルグの言葉と共に、その瞳が広がり、白い部分を黒く染めていく。顔からは血管が浮かび上がり、流れる血は赤から黒に変わる。吐く息は赤く、滴る汗は緑色だ。

「ゲオルグ……？ お前、どうしたんだよ、その体！ 一体何が……！」

「ヘルメス、横に跳べ！」

焦るヘルメスにミチヒサが指示を出す。ヘルメスは戸惑いながらも素早く横に跳躍すると、今まで彼が立っていた場所に光線が走った。ゲオルグの目から放たれたその光線は、正面の床を焼き払い進んでいく。

「我がこの者を屠る。ヘルメスは力を温存しておけ」

ミチヒサは身の丈ほどの大太刀を構え、眼前の敵を睨みつける。

「待てよ！ 殺すのか！？」

ヘルメスはミチヒサの前に立ちほだかり、抗議した。

その瞬間、ヘルメスの背中に衝撃が走り、彼はそのまま前のめりに倒れた。

「ぐあっ……！ ああああああ！」

ゲオルグは血を滴らせたナイフをくると回し、床を耐え難い痛みでのた打ち回るヘルメスを見て、満足そうに笑みを浮かべた。

「相変わらず君は、愚かだね」

「何ということだ……！ 我がついていながら、このようなことになるうとは！」

一国の本拠地でありながら静かだった校内には、一人の少年のによる叫び声が響き渡っていた。

第十三章 友との決着

第十三章 友との決着

刃物で刺されたヘルメスの背から流れ出た血は、極僅かだった。ゲオルグの持つ禍々しいナイフの刃先から垂れる血と、刃を抜かれたときに噴き出た血だけ。

傷口は素早く石化し、それに反応するようにヘルメスは悲痛の叫び声を上げる。

「苦しそうだねヘルメス。今、楽にしてあげるよ」

ゲオルグはニタリと笑みを浮かべ、一切の迷いなく、床で転げ回るヘルメスにナイフを再び突きたてようとした……が、そのナイフは宙に弾き飛ばされた。

「そうはせん！ これ以上、貴様に手出しはさせない。我が貴様を、斬って捨てる！」

ミチヒサは大太刀を構えると、その刃を見た。そこからは黒い煙が小さく発せられており、シューシューと音を立てている。

「む……。僅かだが、そのナイフは生物以外にも効果があるのか……」

ミチヒサの視線が刃に奪われている隙に、ゲオルグは素早くナイフを拾った。

彼等は無言で構えると、相手の目を見ながらジリジリと間合いを取り合う。

「いいのかな？ そんなに慎重に攻めても。早く治療しないと、ヘルメスが死んじゃうよ？」

ゲオルグの冷酷な笑みと共に告げられた言葉に、ミチヒサはギクツと一瞬、床で悶えるヘルメスを見た。

それを待っていたとばかりに、ゲオルグの目が大きく開かれ、ナイフを手ミチヒサに襲い掛かった。

「……速い！」

まるで瞬間移動したかのように間合いを詰められる。密着すれば、長い武器を手に行っているミチヒサは攻撃の隙をなかなか見つけられずに、ただただナイフによる相手の無数の攻撃を回避することしかできない。

「あはははは！ 言っただよ、この武器は拷問用だと。一突きで死ぬほど致死量は高くないさ」

先のゲオルグの言葉はミチヒサの隙を作るための虚言だったのだ。ミチヒサは一度距離を取ろうとするが、相手がそれを執拗な攻撃で許さない。

「ああああああ！」

突然、床で悶えるヘルメスの声が大きくなった。赤い蒸気のようなものが彼の体から立ち上っている。

「うるさいぞ。君は後で始末してやるから、少し黙っていてくれないか？」

そんなヘルメスには目もくれず、冷たく言い放つゲオルグ。ミチヒサに攻撃を続ける彼の目には、ヘルメスの姿は目に映っていない。

「……力が、抑えられない……！ 魔力が……爆発する！」

苦しみながらのその言葉と同時に、彼の背中、その傷を中心とした巨大な爆発が起きた。

ヘルメスはあまりの激痛に、力をセーブしきれなくなったのだ。

爆発後も、体内の魔力が傷から体外にとめどなく溢れ出ている。

鳴り響く轟音と崩壊する周囲。ゲオルグは舌打ち一つ残して回避行動を取る。

「その首、もらった！」

訪れた好機を逃すまいと、ミチヒサはすかさず攻撃に出る。しかしゲオルグはその動きに素早く反応し、ナイフで迎撃の構えを取った。彼らは互いの武器を手肉に肉薄する。一度、二度、刃が鋭い音を響かせて交差し、それぞれの身体に切っ先が迫る。

「相打ち覚悟かい？ この武器を相手に……見上げた根性だよ」

「痛みなどどうでもいい。貴様をここで討てるのならば！」

あと数センチメートルで接触というところで、二人の間に向かって鋭い雷が走る。彼等は急襲を察知すると互いに大きく飛び退いた。そうして間合いが切れたところで、戦いが途切れる。

「邪魔をするなヘルメス！ コイツは危険だ！」

もの凄い剣幕で睨むミチヒサ。ヘルメスはその眉のつり上がった顔を睨み返す。

「ゲオルグは、俺が止める」

ヘルメスは変わり果てた友人に杖を向ける。友の光さえも吸い込むような漆黒の瞳を見つめ、ジリジリと間合いを詰めていく。

「殺せるのか？ 己が友を」

「止めるんだ。俺はコイツを、助けてみせる！」

思い出されるのは、ホームクルス達を葬った時のミチヒサだ。ヘルメスも彼らを殺しはしたが、罪悪感で胸がいっぱいになっていた。だがミチヒサは違う。命を奪っても、何も感じないようなのだ。そんな彼をゲオルグと戦わせようものならば、彼は何のためらいもなく切り捨てるだろう。

ヘルメスの構えた杖の先に、パリパリと電気が迸っている。臨戦態勢だ。しかしその電気は不安定なリズムで、時折消えたりもしている。ゲオルグに負わされた傷が、これ以上なくらいに痛むのだ。毒や痛みで、立っていることすら難しい。

「黙って寝ている。死に損ないが僕に勝てる訳ないだろ」

ゲオルグの見下したような視線が、汗だくのヘルメスの顔に注がれる。ミチヒサはそれを遮るように間に立った。

「止めるだど？ こんな見たことのない症状をどうやって治すと言うのだ。戦争というのは油断をすれば足元をすくわれる。僅かでも敵に可能性を残してはいけない。殺すんだ！」

「治せる可能性ならある。錬金術を学んだレアードがいる！ 俺は絶対に命を軽視しない！」

痛みで歪んだ顔を、歯を食いしばり元に戻す。毒も傷を覆ってい

た石も、先の爆発のおかげか、今はもうない。代わりに多量の血液が溢れ出てきている。

「わかった。ここは任せよう。だが君が敗れそうになったその時は……」

ミチヒサは二人の間から身を引いた。彼の言葉にヘルメスはコクンと頷き、杖に魔力を流し込んでいく。

間合い、中心を、二人はゆっくりと弧を描くような動きで奪い合う。彼等は瞬きもせず、タラリと流れる汗も拭わない。

どれほど時間が経っただろうか。長い攻め合いの末、先に仕掛けたのはゲオルグだった。黒々とした眼から、触れたものを焼き尽くす光線が放たれる。

ノーモーションにして高速の攻撃。だがヘルメスは見事にそれに反応し、ほぼ同時に杖から雷を飛ばす。

二人の攻撃は接触し、均衡状態になった。ゲオルグは黒い血管をビキビキと浮かび上がらせ、光線の威力を高めていく。それに伴い、均衡も徐々に崩れる。

「お前、言ってたよな……」

ヘルメスは杖を握る手に力を込めてポツリと呟いた。

「何をだい？ 死に損ないの出来そこない君？」

赤い息と共に吐き出される、ゲオルグの残忍な言葉。それを聞いたヘルメスは眼にうっすらと涙を浮かべ、叫び出した。

「お前、嬉しそうに言ってたじゃないか！ 『錬金術は人を幸せにする』って！ 戦争でたくさんの人を殺すのが、幸せにするってことなのかよ！」

その声に呼応するように、崩れた均衡が元に戻っていく。

「それは過程にすぎない。大切なのは結果さ」

ゲオルグが更に力を注いでも、今度は力の接点が動かない。緑の汗が、彼の頬を伝っている。

「未来の人も、今の人も！ 同じ命なんだ！ どちらか片方を不幸にするなんて、そんなのダメに決まってるだろ！」

均衡が再び崩れる。ただし、先ほどとは逆の方向に。

ゲオルグの顔からは完全に余裕が消え、歯をむき出しにして食い下がる。

「そんなこともわからないのかよ！ このバカヤロオーオーオー！」

巨大な叫び声が周囲に響き渡る。それと同時に力がゲオルグの方に押されていく。

変わり果てた彼にその声が届くと同時に、ヘルメスの雷がその体を貫く。ゲオルグはゆっくりと宙を舞い、力無く墜落し、ピクリとも動かなくなった。

ヘルメスとミチヒサが彼に駆け寄る。

「仮死状態か」

グツタリと横たわるゲオルグを観察し、ミチヒサが言った。

「拘束、現状態を維持」

ヘルメスが杖を振ると、ゲオルグの体を淡い光が包み込んだ。

「後はレアードに任せるといふ訳か。本当に治せるのだろうか？」

「何をされたかは知らないけど、見込みはあるよ。コイツの武器、一見すると残虐だけど……一撃必殺の武器じゃない。俺はこの武器を選んだのが、コイツの僅かでも残った良心だと思ってる。だからコイツの心は、まだ残ってるはずなんだ」

少しの間、二人はゲオルグの姿を見下ろしていた。形は人のものとは思えない顔だったが、表情は穏やかだった。

「さて、行くか。ここからが正念場だぞ、ヘルメス」

彼等は静かになった人気のない学校内を、奥に向かって進んで行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0439h/>

超常戦争

2010年10月9日22時32分発行